

され、永久に湖北の土となられた方々のことを思うと、やるせない気持ちでいっぱいである。只々、ご冥福をお祈りするのみである。

東安高女、血染めの日の丸鉢巻

青森県 森 勇 男

はじめに

私の本籍地は下北半島の一寒村であるが、両親は青森市に住んでいて、私はそこで生まれ少年期を過ごしていた。長じて青森市内の中学校を卒業して、旅順リョウジュンの師範学校に進学した。母は、私が遠く離れた旅順の学校に入るとは反対していたが、私は大きな喜びと希望を抱いて旅順に行った。

当時、国策の一環として満蒙開拓のための移民が奨励されていて、各県から多くの人々が開拓団員として、また青少年義勇軍として満蒙各地に送り込まれていた。しかし、そのような情勢下において開拓団の人

が一番に頭を悩ませ、心を痛めていたことに、子弟の教育問題があった。私もそのことを知り、師範学校卒業と同時に他のことは何も考えずに、開拓団員の子弟教育に若き情熱を燃やすことを決意して、開拓団の小学校で勤務することを希望し赴任した。以来六年間、開拓団の子弟と共に過ごしてきた。その間には、次から次と新しく開設される開拓団の小学校の開校準備にも度々派遣された。あるときは、三十数人の子供と一緒にになって、団の一家屋に寝起きを共にして越冬したこともあった。派遣されたり本校に戻ったりという経験を繰り返しながら、開拓団子弟の教育に情熱を燃やしていたが、昭和十九（一九四四）年になって、新しく満ノ国境に近い東安市に創立された、東安高等女学校の開校準備に携わり、教諭として女子教育に己の全知全能をぶつけることとなった。師範学校時代の恩師である戸川校長から親書を頂いての招聘だったので、喜んでではせ参じたのだった。ただ、その思いも終戦を迎えて消え失せてしまい、生徒を連れて引き揚げるという責任を負うこととなった。その苦勞は並大抵のこ

とではなかったが、結果的には一人の犠牲者も出さずに、無事にそれぞれの落ち着き先に届けることができた。

滿蒙各地や避難所には言葉に尽くせぬいろいろな惨事、悲劇があつたが、この東安高女の生徒が人間としての極限までの辛苦をなめた避難行もまた、忘れてはならない殉難の記である。私は戦後に生まれ育つた多くの人々に、こんな悲惨なこともあつたということを知ってもらい、改めて当時の日本人が戦争によってどんな運命にさいなまれ、そしていかに生きてきたかを知ってもらいたいと思つて筆を執つた。

一 東安高女開校とその背景

東安高等女学校の創立は、昭和十九年四月一日で、場所は滿ソ国境近くの旧密山街であるが、ここはウスリュー江をソ連との国境線とする興凱湖コウガイコに近いところであつた。

昭和十五、六年頃から、滿ソ国境は日増しに緊張感が増しつゝあつたので、ソ連との国境に近い虎林コリン、虎頭トウ、そして密山地区は国防上重要な位置を占めてい

て、関東軍としても對ソ戦術上の最重要拠点としていた。しかもこの東安省管内には、戦争遂行上無くてはならない重要な鉱物資源が埋蔵されていて、特に鉄鉱石、石炭、石灰石、砂金などが豊富だつた。そのようなことから、滿州国においても軍事面はもとより行政面においても整備が進められて、この地区の中心地の密山の近くに新しく東安市を作り、東安省東安市として独立の行政府を設け、市公署、稅務署、警察署、郵便局、法務院などの官公署が次々と開設されるようになった。

また、對ソ連軍監視の軍關係の配備も急速に進められていて、それに伴つて日本人も急激に増加し、さらに周辺に多くの開拓団も入植してゐた。国境に近くて常に緊張感につつまれてゐたが、五族協和を表す新五色旗のもとに、世界に誇る精強関東軍の庇護を受けて、何の心配もなく生活してゐた。

そのような周囲の情勢から、東安高女の設立となつたのである。四月三日には早くも開校式が挙行され、続いて第一期生の入学式が行われ、次の日から授業が

開始された。それからは、白鉢巻にもんべ姿の生徒と、新しい学校建設のために精を出した。

このように性急な動きに、建物や日常の生活は追いつかず、校舎は兵舎の古いのが充てられ、教科書もなく、当然、教具やグラウンドもない有様だった。東安高女は原則として全寮制であったが、実際には開拓団からの子女も多かったので、市内在任の生徒は自分宅から通学することとなった。

授業の実体は、朝礼、点呼、そして各班の報告、それが終わるとすぐに勤労奉仕が始まる毎日であった。教科書がまだ届いていないので、担任の教諭が自分で原稿を作り、それをガリ版で切り、謄写版で印刷し教科書を作っていた。

生徒たちは、きりりと締めた白鉢巻にもんべ姿、肩にはくわやスコップなどの農耕用具を担った姿で、隊列を組んで軍歌を声高らかに歌いながら校門を出て、開墾地に行き農作業に精を出す毎日であった。班ごとに分かれて作業をしていたが、すべての行動は号令によって動く軍隊調であったが、誰も奇異に思う者もな

く、まさに可憐なる少女戦士そのものであった。

満州は一般的に土地が肥え、耕作物は良くできたが、特に東安省管内は肥沃で、肥料なしでも大豆やカボチャなどは良く育っていた。整った農器具は無くても、くわやシャベルだけでも生徒全員八十六人の団結した耕作力はすごかった。小さな古いプラウがあったので、校庭内では馬の代わりに皆でプラウ引きをやっていたが、「嫌でも回れ」という掛け声で引いていたのを、今でも忘れられない。

寒い冬が過ぎると春と夏とが一緒にやってくる満州。野も山も一斉に花が咲き乱れ、それこそ百花繚乱という言葉どおりであるが、そんな時期、昭和十九年六月に、生徒は信濃開拓団に勤労奉仕に行った。

その頃になると、戦局も極端に悪化の一端をたどり、在満日本人の安堵感のよりどころである精強関東軍も、その主力は逐次南方などに送り込まれ、七十万いた兵力は十万になり弱体化し、その穴埋めに在満成人男子が大量に現地召集されたが、その最大の被害者は各地の開拓団であった。男手が何よりの頼りである

現地は、老人、女、そして子供だけの団となっていた。この信濃開拓団も同じ事情であった。

留守を守る奥さんは、朝早くから日が沈んで夜になっても働いていた。生徒たちも、少しでもお役に立ちたいとばかりに、一生懸命草刈りや家畜の世話に精を出した。夜になるとランプの生活で、一層わびしさがつのり、自分たちの家族を思い出して涙ぐむ者もいたが、主人を兵隊に取られ幼い子供を育てながら、朝から夜まで一生懸命に汗してけなげに働く若いお母さんの姿に励まされて、気持ちを取り直して奉仕をしていた。蚊や虻には随分と悩まされたし、手にはまめを作り、それが破れて血がにじんでくるし、慣れない農作業で身体はあちこち痛くなって、泣くに泣けない有様だったが、それでももっと苦勞をしている周囲の人たちの姿を見ると、泣き言は言えなかった。それにしても昼間は何とか仕事に紛れて過ごしていたが、夜はやはり嫌だった。特に夜中に便所に行くことが恐ろしかったようだ。しかしその反面、ランプ生活での暮らしも良い思い出になっているようだ。

二カ月間の信濃開拓団での勤勞奉仕が終わり、学校に戻った。間もなく楽しみにしている夏休みになるという時に、「夏休みは返上して奉仕作業を続ける」という学校方針が伝えられて、生徒はがっかりしていたが、私たち教諭は周囲の切羽詰まった情勢から致し方ないと生徒を慰めて回った。

二 興凱湖の見学と守備隊慰問

夏休み返上の話が生徒の間で持ちきりのところに、耳寄りな話が出た。それは、夏休み前の運動会の代わりに、満ソ国境に接して広がる神秘の湖、興凱湖での水泳訓練と国境最前線で警備に任じている独立守備隊將兵の慰問であった。

興凱湖は、ウスリュー江の水を集めた満州最大の広くて大きな湖で、全面積の三分の一は満州国領内にあり、東安市のすぐ南に位置し、湖水の美しさと品質の良いメノウの原石を産出するので有名である。現在では興凱湖への旅行など思いもよらないことで、この体験を有する東安高女出身者は、このことだけで見れば良い経験をしたものである。

貨物列車の最後尾に連結された一両の客車に生徒たちは乗り込んだが、その行動は意外と静かで、皆はがたがたと横揺れしながら走っていく客車の中で不安そうにしている、誰一人声を出す者もなく座っていた。列車の走る音そのものが不気味であった。周囲は荒漠たる湿地帯で、生えている草の丈も大きく、それがどこまでも続いている。鳥か獣かよく分からないが、時々ただけしい奇声を発しているのが聞こえるだけだった。まさに茫漠たる大湿原であり、列車はただひたすらに揺れながら走っている。急に目の前が明るくなったと思ったら、そこには大きな鶴の優美な姿が目に入った。無数の群れをなしている鶴の集団であった。毅然として佇んでいる。遙か彼方の堤には数百、数千の数え切れないキジの群れが目に入った。しばらく茫然として車窓から走り行く風景を眺めていたが、私も満州に十年近くいて、こんな風景は初めてだった。今まで知っていた大陸満州とはまた異なった景観に、ただ感嘆するばかりだった。

移り行く景観に我を忘れているうちに、紺碧に輝く

大空の下に、興凱湖が霧に包まれてその雄大な姿を現してきた。神秘的な色彩に生徒たちも胸を打たれたようだった。感動に揺れる心は、やがて可憐な声の合唱となった。それは新しい校歌の一節で、歌声はだんだんと大きくなり、車内に響いていた。

興凱の水面に映る国境

狭霧を分けて乙女われ

今し進まん

嗚呼 われら血潮湧く

愉しさに 血潮湧く

日本画そのままの国境の大鶴の姿は、大地を守る雄姿である。辺り一面見渡す限りの花、百花繚乱、正に夢の国、おとぎの国であった。夏の満州は、まことに理想の天国であった。思いもよらぬ敗戦、それからの苦難の難民生活の中で、その全てを支えてくれたのは、この興凱湖での大きな感動を大切に持ち歩いていたからだと思う。

その夜は、国境最前線の当壁鎮の小さな小学校に宿泊して、独立守備隊を慰問した。歌や踊りや寸劇の

他、詩や作文の朗読などを力いっぱい出し切つての慰問だった。兵隊さんたちは年配者が多く、生徒から見ればお父さんのような感じであり、兵隊さんからすれば我が娘の感じだったろう。ドラム缶風呂にも初めて入った。

翌日から霧の興凱湖で過ごし、湖に入ったり、白魚を釣ったり、メノウの原石を探し求めて砂浜を歩き回ったりしていた。「皆大きな声で、お母さんと叫ぼう！」という女の先生の音頭で、皆は目にいっぱい涙をためて、お互いに手を握り合つて「お母さん！お母さん！」と霧に煙る湖面に向かって叫んだが、あの感動はいつまでも忘れられない。

昭和十九年はいろいろなことがあつたが、どうやら無事に何事もなく過ごすことができた。

三 血染めの日の丸鉢巻

昭和二十年になると、戦局は緊迫そのものとなつてきて、生活物資も少なくなり、特に食糧難で、満州にも危機感が迫ってきた。三月には東京でも大空襲があり、下町の大半が焼け野原と化し、国民に大きな不安

を与えていた。でも、満州には関東軍が堅く守りについているからと、皆安心していた。ソ連軍は日ソ不可侵条約のためにまだ沈黙を守っていたし、満州はまだ表面的には穏やかな日々であつた。四月には東安高女でも新入生七十八人を第二期生として迎えた。校舍もれんが造りの建物に移ることとなり、生徒は希望に満ちていた。しかしながらだんだんと弱体化している関東軍では、これを補うための在満日本人男子を現地召集し、十七歳から四十二、三歳までの人を徴集した。いわゆる根こそぎ動員である。

そのような情勢下において、東安高女では昭和二十一年七月十日に、誠に厳粛な行事が行われた。それは、「血染めの日の丸鉢巻」の贈呈式である。

当時、北満の杏樹には内地から転地して飛行訓練に励んでいる陸軍航空士官学校の五十八期生、五十九期生がいたが、五十八期生は単独飛行を、五十九期生は教官指導による飛行訓練をしていた。夏休みを返上した生徒は、その名を女子挺身隊と改めて、この杏樹に勤労奉仕に行くことに決まり、航空隊と近くの陸軍病

院の二班に分かれて奉仕することとなった。

航空隊では、当時の戦局全般に対する不安を抱く地元の人たちを招待して、日本陸軍の飛行訓練の実態を見てもらい、信頼感を醸成するためのデモンストレーションを公開した。編隊飛行、急降下爆撃、急降下襲撃、空中戦など実戦さながらの状況を華々しく展開した。展示演習が終わってから、地元主催による大慰勞会が盛大に開かれた。その慰勞会の最後を締めくくる行事として、航空士官学校の勇士が壇上に並び、東安高女の生徒が前日に一人一人自らの小指を切って作った血染めの日の丸鉢巻を贈呈するという悲壮な行事が行われた。

生徒たちが、乙女の純情を込め、かつ武運長久を祈って作った四十二本の鉢巻が、三方に乗せられてあった。贈る生徒も、これを受け取る勇士も感動そのもので、命を賭けて敵機に立ち向かう将校の卵の顔は、神々しいばかりの輝きで、両者には愛国の至情が溢れていた。あの当時の若者には、男であれ女であれ、ただ祖国の一大事を思う殉国の精神だけが深く心

に焼き付いていたのであろう。

その後、聞くところによると、勇士はこの血染めの日の丸鉢巻を胸に巻き、一日たりとも肌身から離さなかったとのことだ。八月九日、突然のソ連軍の攻撃によって、若き勇士の覚悟は無惨にも打ち崩され、殉国一途の心に大きな空洞を生じ、「このまま、おめおめと祖国には帰れない！」との堅い思いから、自爆した人もいた。その一人の今少尉の弟さんは、戦後、自爆地を慰霊訪問して「兄は、自爆するときにあの鉢巻を頭に締めていたと私は信じている」という手紙をもらい、心から感動したものだ。

四 女子挺身隊としての行動

東安女子挺身隊は、白鉢巻をきりりと締めて七月十一日に東安駅を出発し、一路杏樹に向かった。駅では父兄や二期生をはじめ学校関係者、多くの市民に見送られて雄々しく出発したが、まさかこれが父兄や友人たちとの最後の別れになるうとは、全く夢にも思わなかった。女子挺身隊員八十人、付き添いの教師六人で、杏樹では二個班に分けた。

生徒にとつては、勇躍という言葉がびつたりする希望に満ち満ちたものであった。

病院班は、洗濯や掃除、それに患者の看護手伝い、包帯の整理などの仕事だったが、好天の日には野山に行つて薬草を採つてきて、正露丸のような丸薬を作つたりした。生徒は使命感に燃えていて、どんな仕事でも嫌な顔一つせずに気持ちよく応じていたので、患者や病院の人々からも大いに喜ばれ感謝されていた。

一方、航空隊班は落下傘を格納室から出して飛行場の一隅に広げて、天日に当てる乾燥させる仕事が多かったが、その開き方や、折り畳み方は教官によって厳しく指導されていた。間違つた畳み方をすれば開かなくなるといふことで、乙女たちも随分と気を使つて仕事をしていく。

だんだんと戦局は厳しくなり、杏樹方面にも空襲が予想されるとのこと、防空壕掘りが始まり、毎日慣れない手で穴掘り作業もしていた。私は一番若い教諭だったので、病院と航空隊の両班を掛け持ちで回り、生徒の指導や連絡に任じていた。ある日、病院長と言

葉を交わす機会があつたが、病院長は「生徒たちが、きびきびした態度で働いてくれるので患者もとても喜んでいゝ。航空隊でも、そのように言っている」などと話した後、「実は、次にここに来る予定になっている六十期生が、本校は既に出発したのに朝鮮に着いたという報告もなく、心配している」と話されたので、私は随分と気になった。

その日の午後、学校の事務長から電話連絡を受け、「森先生、召集令状がきたのですぐ学校に戻つて下さい」との連絡が入つた。私は覚悟はしていたが、いささか慌てて翌朝の汽車で東安に帰つた。八月七日のことだつたと思う。

学校では、女子教員の資格講習が実施されていて、二十人ほどが近くの開拓団小学校から集まつていて、にぎやかだつた。その日の夕方、関東軍から連絡があり、「ソ連軍の動向が怪しくなつてきたので、東安市内警備のため学校に本部を置いた約一個中隊二百人を学校に泊める」とのこと、間もなく部隊がやつてきて、武器、糧秣を次々と運び込んだ。

校長は、「さすがは関東軍だ、ソ連軍が動いても市内の守りは万全だろう」と喜んでた。経理部の将校が一升瓶と缶詰を持ってきて、「急に校舎に乗り込んできてびっくりされたでしょう。これで一杯やって下さい」と慰めてくれた。しばらくぶりで一杯飲んだので、皆ぐっすり寝込んでしまった。夜中になって校長が飛んできて、「森先生、起きて！ 兵隊たちがいない」と怒鳴っていた。びっくりして起きてみると校庭のあちこちで、書類や私物などを燃やしたらしい跡があり、十頭近くいた馬もいないし、兵隊の姿も一兵も見当たらない。

その日の朝には、市内放送が頻繁に緊急放送をしていたが、これは避難命令だった。「ソ連軍が攻撃してくるらしい。三日分ぐらいの食糧と身の回り品を持って東安駅に集合。避難列車で一時市外に行くことも考えておいて欲しい」というような内容だった。この放送は、何回も何回も繰り返されていた。避難準備をして登校してきた生徒や、講習中の女教師、それに学校関係の家族を引き連れて、私は東安駅に向かった。も

う既に駅前はたぐさんの人々で身動きのできない有様だった。近在の開拓団の人が、次々と馬車で駆け付けてくるので大変な混雑となったが、避難列車はなかなか来ない。夜に入ると一層混雑はひどくなってきた。集まった人々の不安は募るばかりだが、正しい情報は全然伝わってこない。駅周辺はいわゆるパニック状態となってきた。夜中の十二時近くになってやっと列車が入ってきた。

病人であろうが老人であろうが、男は絶対に乗せないと言う。生徒や講習にきていた女教師、それに家族をやっと乗せることができたが、列車はなかなか動かなかった。学校の方も心配なので、列車が早く南下してくれることを祈りつつ、生徒たちと別れて戻った。

学校に戻りほっとしたが、昨夜の騒動のこともあったので、校長以下疲労困憊、早く休もうということになり、それぞれの部屋に引き揚げて、何もかも忘れて眠った。八月八日の夜は過ぎていった。

五 東安駅爆発と避難列車襲撃

一眠りした頃、突然校舎全体が大きく揺れ、すぐに

ものすごい爆発音が響いた。驚いて飛び起き校長室に行った。地震ではない。ソ連軍の攻撃だと一瞬緊張した。校長が「森先生、憲兵隊長のところに行つて情報を取つてきて欲しい」と言うので、早速に憲兵隊に飛んでいった。だが、憲兵隊には誰一人いない。外では書類を燃やしたと思われる様子が見られた。昨夜の学校での出来事と同じである。すぐに戻つて報告する。校長は、「いよいよソ連軍の攻撃が始まったのか？かねての計画通り銃器を持って東安飛行場に行こう。各自に食糧を持って出発しよう」と指示した。食糧は一昨日山ほど置いて行つたので、各自はリュックサックに詰めるだけ詰め込んで、軍刀とピストルを持って飛行場に急いだ。私たちには、東安市内警備の任務が与えられていたが、飛行場には誰もいなかった。皆、山の方に行つたということで、私たちも山に向かって急いだ。そこで東安市長の一団に合つて、一緒に行動することになった。五百人以上の大集団だった。

間もなく、飛行機の爆音が響いてきたので、皆は「いよいよ関東軍のお出掛けか！」と飛行機の方に向

かつて手を振つたところ、こちらに向かつてきた飛行機は、銃撃しながら近づいてきた。「あれはソ連軍の飛行機だ！」と、皆慌てて草むらや木陰に身を隠した。幸いに発見が早かったので、犠牲者は出なかつた。

後で分かつたことだが、この日、八月九日午前零時を期して、ソ連軍は満ソ国境を数カ所から破り、突然に無通告で侵入してきたのだ。夜明け前の大爆発音は、東安駅近くの弾薬庫を関東軍が自ら爆破したことによるもので、駅前に集まっていた多数の避難民が犠牲になり、死者五百人とも言われていたが、その実態は分からないままである。後年、「東安駅爆破事件」として知られている事件である。この時には、生徒たちの乗った避難列車は、まだ東安駅構内に止まっていたが、不幸中の幸いで、最後尾の一両だけが犠牲になり、生徒たちの一団が乗った客車は、危機一髪で東安駅を脱出することができたそうだ。だが、それからも途中で何回となく襲撃してくるソ連機の銃撃にさらされて、その都度列車から飛び降りては退避したそう

だ。列車も発進停止を繰り返し、やっと牡丹江^{ポダンキョウ}駅近くまで来た時に、今度は大編隊による襲撃に遭遇した。この襲撃によって二年生の中村みどりさんが頭を撃ち抜かれて即死し、隣にいた大国先生は腕を撃たれて重傷を負い、病院を探しに下車した。それからの行動は誰もつかめなかったが、牡丹江の陸軍病院で処置を受けて、無事に九州に帰ったことを後で知り、ほっとしたものだ。

この犠牲者を出した避難列車は牡丹江で止まり、生徒たちは牡丹江高女で一夜を過ごしたが、その後の消息は今もって不明である。

六 女子挺身隊の状況

女子挺身隊として杏樹にいた八十人の生徒は、野中教諭の指導により、毎日白鉢巻を締め、軍歌を声高らかに歌い、規律正しく奉仕に励んでいた。

八月になると様々な情報が入ってきて、自分たちの入る防空壕掘りにも精を出していたが、飛行隊はここを捨てて新京（長春）に移ることになり、挺身隊も同行することとなった。八月十日の朝、各人は毛布一

枚、乾パン二枚を受けて、軍用貨車でまっすぐに新京に向かったが、途中で鉄道爆破の情報が入り、北に向かい佳木斯^{キヤムス}駅に着いた。待合室で一夜を明かしたが、士官生徒と一緒にだったので安心して落ち着いていたさうだ。ここで軍の酒保から非常糧食、米、塩などをたくさんもらい、二日間北滿の広野を走っては止まり、止まっては走りだして八月十三日にやっとハルビン駅に到着した。ここではハルビン市内の状況が不安定だったので、数日列車内に籠城したが、結局生徒たちは降ろされて、引率の野中教諭の前任校だった花園国民学校に一応落ち着いた。それから二日後のこと、航空隊の准尉など六人が本隊との連絡員として派遣されてきたので、教員ということで一緒に行動することになった。男手の少ないときなので大変に心強いことで、歓迎をしたさうだ。早速に有り合わせの服を着て、教員として応援してもらうことになった。この時期に終戦の重大放送があったなどは全然知らなかったとのことだった。

やがてハルビンにもソ連兵が進駐してきたし、中国

人も日本の敗戦を知り、暴動や略奪を始めるようになった。特にソ連兵の女狩りはひどいものがあり、生徒の身にも危険が迫ってきたので、ハルビン駅近くの桃山国民学校に移った。その頃、にわかには教員となった六人のうち四人が、ソ連兵に連行され戻ってこなかった。万一にもソ連兵によって屈辱を受けるような事態になったときのために、青酸カリを生徒たちに分け与えた。

満州の冬は早い。夏はあっても秋が短くてすぐに冬となる。毛布一枚では到底夜を明かせなくなったので、早く南下できるように引率の教諭は走り回ったという。やがて九月末か十月初めには南下できるということになり、それまでの間、桃山国民学校で寝起きをしていた。

やっと南下する列車に全員乗ることができ、もちろん無蓋車だったが一步でも一分でも早く南に行きたい気持ちで、不平不満を言う生徒は一人もおらず、喜んで乗り込んだそうだが、その希望もかなえられずに新京で下車させられた。新京では室町国民学校に一泊

し、次の日には新京南方の大房身に移された。大房身は閑静な官舎団地で、一戸三部屋ぐらいの家を四軒割り当てられて、生徒たちもようやく人間らしい生活ができるようになった。ここでは、熊本県出身の古賀さんという、以前から中国で生活をしている人に随分と世話になったとのことで、生徒にとっては恩人であった。

そのうちにこの大房身にもソ連兵が出没するようになり、あちらこちらで女性の痛ましい犠牲者が多発し、治安が悪くなってきたので、新京市内に近い緑園にあった教員住宅に移り、やっと安心した。

十月二十日頃に、校長をはじめとする私たち教諭団が新京にたどり着いて、緑園で挺身隊の生徒たちと無事に会い、お互いの健在を喜び合った。それから引き揚げるまでの約九カ月を校長を中心にして、生徒と教諭が一体となって助け合い、励まし合って生き抜くことになった。

七 私たちの山中避難

東安市長の一団と一緒に行動していた私たちは、五

百人以上の大集団となり、徒歩で南に向かって長蛇の列が続き、ソ連機の攻撃目標となり犠牲者も出てきたので、校長は「このままではソ連軍の餌食になるばかり。思い切ってこの一団と分かれて山に入ろう」と決心を示した。開拓団の人たちもついてきた。雨が降り続けて止まなかった。道はぬかり、トラックは動けなくなった。食べ物も、放置されている日本軍の車から探してきた。

開拓団の母親たちも、赤子を背中に子供の手を引いてついてきた。四日月頃になると、現地人が放置してあるトラックを遠巻きにして集まっているので恐ろしくて近寄れず、また、昼間歩いていると誘われて連れ去られる人もいて、不安が広がっていた。昼は木陰や草むらに隠れて夜だけ歩くことにしたが、暗い道なき道を歩くので、子供連れには全く無理だった。そのうちに子供たちは泣き出すし、泣き出すと「声を出させなな！」と母子は叱られるし、かわいそうだった。しかし一団から遅れると狼の餌食になる。そうなるかと捨て子を見受けるようになる。昼間、隠れている

木陰や草むらで疲れて眠っている子供に、少しばかりの菓子などを置いて立ち去って行くのだが、その母親の気持ちは理解できないものではなかった。背中には赤子を背負っているし、歩けなくて泣きわめく子供は他の人たちから怒鳴られ、迷惑をかけるし、母親自身も食べる物がなくふらふらしている。そんなことから、熟睡している子供をみると置き去りにするという気持ちになってくるのだろうが、我が子にわびながら立ち去る母親の気持ちは、どんなに苦しいことだろう。まさに生き地獄である。最初は、四、五歳の子供が捨てられ、次いで背中の子供が捨てられた。

生徒の杉山さんの弟が、後に書いた記録に「水が欲しいとごねる弟が、ようやく眠りました。母はバンド代わりにしていた巻き尺を取り出して、弟の首に巻きました。僕と妹に『手足を押さえてね』と言って、弟に向かい『富明や、先に行っててね。母ちゃんたちもすぐに後から行くからね!』と言いながら巻き尺を引っ張りました。弟は眠ったまま天国に召されたのです。この夜、一晚に三十二人もいた七歳以下の子供

が、女の子二人を残して皆親の手で天国に行ったのでした」とある。

捨てられた子は満人に拾われたり、助けられたりしたが、その数は多く、やがては中国残留孤児となって肉親捜しに来日するようになった。このような惨状の中ではどうすることもできずに、ただ、山また山を越えて歩いたが、食べる物はなく生水は絶対に飲めずに苦しい避難行だった。山から見下ろすと開拓団らしい所があつて畑が見える。夜中にここに忍び込み、南瓜や馬鈴薯を盗もうとすると見張りの満人から威嚇射撃を受ける。しかし何とかして取らなくては明日は歩けない、決死的な行動だった。この避難行は約一カ月ぐらい続いた。橋という橋は全て壊されているので、男も女も川にぶつかると裸になり、着ている物を頭に乘せて渡ったが、水張れになった死体がいくつも浮かんでいた。向かいの山がどうしても越せずに、そこで数日を過ごしたが、その間にも避難民がどんどん増えてきた。そこで戦争が終わり日本が負けたことを知り、ソ連兵に捕らえられた。

約一カ月間、屋根がなくて壁だけ残った兵舎に收容された。多分、横道河子の辺りだと思う。ソ連兵の監視のもと、收容所を転々としてハルビンにたどり着いてそこで放免された。杏樹から避難した女子挺身隊の生徒のことが心配になっていたが、新京にたどり着いていることを知り、すぐに新京に向かい緑園で涙の再会をした。

八 新京での生活と引揚げ

お互いに生きて再会した感動は、いまだに忘れられない。それに畳の上で生活できる喜びは大きく、生きているのだと体全体で味わった。先着の生徒に、「ありがとう！」と率直に感謝したものだ。

粗暴なソ連兵による女狩りや略奪から身を守るのに随分と苦労したことや、生徒が交代でソ連軍将校の宿舍の掃除や洗濯に行つて黒パンをもらつて飢えをしのいだことなど、尽きぬ話に笑いを取り戻した。ロシア語の達者な野中先生が随分と苦労をしたそうだ。そのうちに新京では男狩りが始まった。関東軍の捕虜だけでは、ソ連軍の計画していた使役力が不足するので、

一般邦人男子で補うということらしい。私たち男の教諭は、二週間ぐらいたったがこの住宅の屋根裏に隠れてシベリア送りの難を逃れたが、これは生徒たちのおかげだった。

新京で生徒と一緒に暮らしたのは、およそ九カ月ぐらいたった。何分、ソ連軍が侵攻してきたのは真夏で生徒たちも私たち教諭も皆夏服だったので、まず一番に冬に備える服装を準備しなければならなかった。次に毎日の食べることだった。配給の食糧は消化の悪い高粱で、ゆっくりと時間をかけないと煮えず、生煮えを食べるとすぐに消化不良で下痢をした。また発疹チフスも心配だった。

家族を捜し当てて出て行く生徒もいたが、反対に親の所在が分かって連絡は取り合っているも、引き取れない親もいた。また、逆に病気の母親を見るに見兼ねて引き取った生徒もいたが、その事情はいろいろだった。

寒さは日増しに加わってきたが、暖房もなく新京でも毎日何百人という避難民が、飢えと寒気で死んで

いった。

八十人ぐらいの生徒も、思い思いに立ち売りや使役などに進んで出て行き、涙ぐましいものだった。栄養補給のためにはカエル捕りもやっていたし、建物を壊して燃料用の薪を作ったりもしていた。放置されたままになっている畑を買って、作付けされている馬鈴薯や人参などを収穫したこともあった。

そのうちにソ連軍が引き揚げて、国民中央軍が進駐し、すぐに中共軍が入れ替わるといった波乱の世情となり、その都度小競り合いが起こって少なからずの犠牲者がでたが、その犠牲者はほとんど日本人だった。

疲労と栄養失調、不衛生と心労などが重なって、恐れられていた発疹チフスが流行して、生徒たちの宿舎にも及んで、何人かの生徒が倒れ、女の先生は献身的な看護で大変だった。着ている衣服の消毒は徹底して行った。

避難民にも次から次と犠牲者が出ていたが、生徒の中から犠牲者を出すことのないようにいろいろな知識を絞った。小麦の入っていた袋を縫い合わせて布団

を作り、れんがを拾い集めてベチカを作った。また、新京の日本人会に頼んで、ぼろ同然の古衣類をもらい集めたりもした。考えられることは、すべて考えて実行した。ありとあらゆる仕事をし、励まし合い抱き合って、苦しい難民生活を過ごしたが、それは語り尽くせぬ数々の尊くも悲しい毎日であった。

何回も繰り返されてきた帰国者名簿の調査の結果、いよいよ日本に帰れる日がやってきた。慌ただしく引揚者の一団に入り、新京を出発した。私が着けていた腕章を見ると、「長春市日僑俘管理所 中華民国三十五年七月十二日」とある。列車には乗せられたが、無蓋車で、のろのろ運転であった。それでも動いている間は安全だが、いったん止まるとたくさん満人が寄ってくるので、危険極まりなかった。特に困ったことは飲み水の補給で、うっかり車の外に出ればすぐに満人に連れ去られてしまう。そのうち頭を働かせて、薬缶にお金を入れて下ろすことを考え、こうするとあまり危険なく水の補給ができた。

ついに念願の引揚港である葫蘆島^{コロトッカ}に全員無事に着い

たが、そこでも船に乗る順番を何日も待たされた。せつかく日本に帰る船を目の前にして、病気で亡くなる人、事件に巻き込まれて行方不明になる人、そして病気やけがをする人などの悲劇が続いた。生徒は一人の犠牲者もなく、全員よく頑張った。

とうとう夢にまで見ていた乗船である。船は雲仙丸だった。早く岸壁を離れてくれればいいなと思っても、なかなか動かない。船内は三重ぐらいに上下が仕切られていて、立ったり座ったりが困難で、牛馬よりもひどい扱いだが、それでも日本に帰れるという気持ちで文句を言う者もいなかった。何日かかったのかあまり記憶に残っていないが、ある日、波の向こうに島影が見えた。一同は「幻ではない、夢ではない、日本だ!」と歓声をあげた。七月二十八日に博多港に上陸した。

大きな白い米のおにぎりをおいしく食べたことだけが、強く印象に残っている。また、出迎えの人が「学校の生徒がまとまって帰ってきたのは初めてだ」と言っていたことが、耳に残っている。

ここでそれぞれの出身地に向かって別れた。私は青森だったので、日本海回りの奥羽線に乗り、何人かの生徒を連れて出発した。満州生まれで本籍や故郷の名前しか知らない生徒もいた。下車する本人はそこでひとりぼっちになるのだから、寂しさと不安でいっぱいである。「駅に降りたら、駅前の交番に行ってお巡りさんによく聞くんだよ!」と、囁んで含めるように言った。

私は青森駅に着いたが、駅通りにあった我が家は全くなかった。我が家だけではなく、見渡す限り焼け野原だった。家の跡と思われる所を、ただうろろうとしていた。日は暮れそうになってくる。どうしてよいのやら困り果てて石の上に座っていた。そこで旧友の吉田君から声を掛けられて、彼の家に連れて行かれた。文字通り地獄に仏で、私には何物にも替えられない友の声だった。

吉田君の調べで、長兄は本籍地の下北半島に疎開しているらしいが、すぐ上の兄は津軽にいららしいとのこと、そこに行った。

七十歳を過ぎた母も元気で、「お前が満州から帰ってきた顔を見ないうちは、死ねない」と言って、毎日仏壇にお燈明を点けて死んだ父に話しかけていたとのことだった。

母は、私を見て安心したのか、約三カ月後にあの世に旅立ってしまった。

博多港の片隅で、生徒たちと歌った別れの歌「つりがね草」。この歌は、生徒と私たち教師とのその後の人生の固い絆となった。

人縁という言葉は聞いたことはないが、私たちは東安高女を母体として、戸川校長に抱かれて結ばれ生きてきた。まさに人縁という他ない不思議なつながりである。「人と人との縁」というより表し方がない。それは他の人たちが持てない特別なお互いの経験からきているものだと思う。人生は短いというが、年老いた一日は確かに長い。これからの生き甲斐を大切にしたいものである。

「つりがね草の 咲く丘に

さみしく今日も 日が暮れる

ほろほろと鳴く鳥は

親なし鳥よ 母恋し」

私たち東安高女の関係者にとつては永久に忘れられない歌である。

純子！

岩手県 阿部 とし

私は昭和十六（一九四一）年一月に、軍人だった阿部忠孝と結婚してすぐに、その夫と共に北滿の牡丹江（ボクレンコウ）を経て、ソ連との国境に接している虎林（コリン）の虎頭（コトウ）という町に駐屯する、第三九五部隊の将校官舎に赴任しました。周田は見渡す限り広漠とした原野で、今まではただ漠然とした思ひしか持っていなかった大陸というものゝを初めて知り、肌で感じ取りました。そこには、兵営と官舎の他に、日用品を売っている酒保と海産物を取り扱っている店があるだけでした。官舎は、部長長級の方々の官舎が横並びに三列あり、次いで中隊長

級の方々の官舎がその後ろに三列と、おおむね階級順に配列されていきました。鉄筋コンクリート造りの二階建てで、ベランダが広がったのが印象に残っています。当時、内地ではあまり見掛けられない近代的なつくりでした。

私たち夫婦の入った官舎の間取りは、八畳、六畳、四畳半の三部屋で、それに炊事場、風呂場、便所がついていて、新婚家庭では広々としていてもつたいないような家でした。便所にはスチーム暖房が通っていて便利でしたが、ただ炊事と風呂の燃料が石炭でしたので、なかなか思うようにいかずに、火起こしに不慣れな私は、最初の頃は火加減が分からずにいつも黒焦げのご飯ばかり作っていました。

ただ一つの楽しみは、虎頭の市街に行っているいろいろと満人の店を見て回ったり、飯店で食事をするのですが、とても私一人ではどこにも行けませんでした。周辺の要所要所には歩哨が立っておりました。野原に出掛けて、ヨモギやアカサなどの食べられる野草を摘みに行き、それをおひたしにして食べたとき